

世界にたった1台。
ミッレ・ミリアに参戦するためにのみ生まれたスポーツカーがある。
その名もMorassutti Sport。
モラッスティー伯爵が自らの参戦のために造りあげたというこの1台は、
いま、日本で過ごしている。本邦、初公開をしたい。

文・中三川文雄／写真・高崎ユキ／車輿オーナー・小宮眞理氏
取材協力・BS中野 東京都町田市小野路町2415-1 042-736-4423



貴族のためのスポーツカー

Morassutti Sportの仕様を解説しておこう。車体には1933年型と記されている。全長336cm、全幅130cm、そして、オープンボディゆえ全高は126cmに満たない95cmと、ホンダの500よりやや低いかなという程度の小さいボディだ。車輪直径は427mm。だが、この小さいボディを見て、ライトウェイトスポーツカーだと安易に括することはできない。

4速14号で変速したように、サイトラウェイトスポーツカーとは、汎用パーツを用いたスポーツカーで人々にサーキットレースの楽しさと意識を植え付ける。貴族でない貴族がお金をかけずに、ボディを軽く、エンジンをチューンアップして運動性能を上げる。もちろん競技ありきで、サーキットレースの大量化を促進させた存在とされる。

Morassutti Sportは、初代フィアット500たるトップサーノの4気筒1700ccエンジンを改造した4800ccエンジンが搭載されている。量産エンジンのチューンアップ版を輸入で数日の軽装ボディを引っ張るという意味ではライトウェイトスポーツカーに近い自白かと思えるが、その開発経緯はあくまでMorassutti伯爵という貴族のためのワンオフ車であり、それはスポーツカーに近い。これが商品として複数台が生産されるようになればまた話は違ってくるだろう。しかし、どこの文脈を読んでもこのボディが由てくることはない。間違いない。この1台しか残存しないのだから、大衆車の改造版としてのライトウェイトスポーツカーではなく、正真正正のスポーツカーであると断定したい。

Morassutti Sportのメンテナンスを引き受けるBS中野の眞野 悠氏に話を伺うと、さらに特殊性が浮かび上がってくる。

「鉄のチューブカーフレームにアルミの外板を覆う構造を持っています。その外板の加工が実に巧い。フェンダーラインなどの曲面を見ると、当時の職人が叩きあげた光景が目に浮かんでくる。生産性を気にせず好きなような形に加工していったように感じる」

生産性やコストを考えず、Morassutti伯爵のイメージを輸入たちの技がスタイルに具現化した様子が浮かんでくる。

インテリアは簡略化のアルミ板を基本に構築されているが、この部分は漆に少しばかり素人の手作りっぽさを感じる。これは、長い年月を経た中で、行われたレストレーションを行った職人がへただったのか、Morassutti伯爵が気にも留めなかったのか、とあるかなだろう。できれば後者であってほしい。伯爵が良ければ良し。こだわる部分はトボトン追従する。そういうモデルなのである。

